

ニコポナデポチンポ

青木ルリ

ハーメルンは夢と同じもので形作られている

目次

すばらしき○ッシユ	1
なんかちいさくてかわいいやつ	9
チンポ	17
TS 悪役令嬢神様転生善人追放RTA	25
TS はホモだろ	35
ニコナデポ・チンポマン	43
賭ケグルイカイジ ㄱ盾の勇者の成り上がりㄱ	51
真の实力はギリギリまで隠しておくべきだったかもしれない	63
シン・ニコポナデポチンポ	71

すばらしき○ッシュ

何もかも無許可だけど成り上がるシンデレラストーリーとして覇権を握っていく所存であります

最近流行りの異世界転生をした。

いやもう流行ってすらいないけどね。

擦られすぎて逆に飽和状態だし、神様と話して特典貰うとか二次創作だから許されるのであってオリジナルでやる意味がわからん。そんなに舞台整えるのめんどいのかよとしか言うことがない。

それら全てが今目の前で起きていて尚且つ自分が体験しているという事実がなければ、そうやって大手を振って批判できるんだが。

『すまんが、君は死んでしまった』

「どっかで聞いたことのある台詞だな……」

『儂の操作ミスで天候バグっちゃったのだ。申し訳ないのだ』

「その口調はずんだもんだろうがクソジジイ」

『梁渡りさえ上手くいってればこんなことにはなっていなかったのだ』

へけっ！ などと言いながらふざけたことを宣ったジジイに物理的な攻撃を仕掛けて命中した所で、現実逃避をやめることにした。

「死んだならもう終わらせてくれないか？ 俺は一度死んだ命に縋りつく程未練がある訳でもないし、現代日本以外に生まれてまともに生きていけるとは思えない。なら詫びとしてここで終わらせてくれないんじやないだろうか」

『一応言っておくとこの会話は自動音声じゃからお主が何を言おうと変わることはないぞ』

「失せるゴミが」

ここまで予想通りかよふざけんな。

真っ白な空間で突然話しかけられ、他にすることも特に無いし仕方ないから話を聞くことにした。

曰く、俺の死は想定外。

曰く、詫びとして転生させる。

曰く、特典もあげちゃう。

あーはいはいテンプレテンプレ。

『後はこのクジ引いたらお主は転生するからの』

「こいつマジで自動音声だったな……」

途中目の前で踊ったり全裸になったりチンポ見せつけたりしたのに無反応だった。ガチのマジで自動音声だし本体ですら無いし見てすら無い、これで詫びとして転生とか舐め腐ってるだろ。

いつか殺すリストに入れた。

舌打ち一つかました後にぶっきらぼうにクジを手取る。

「えーと、なにに……『ニコポナデポチンポ』」

は？

『それじゃあ転生ライフ満喫するのだ』

「少しは説明しろや!!」

俺の意識は眩い光に包まれて途絶えた。

「そんなこともあったような気がするぜ」

「おはようアツシュ!!!!!!!!!!!!!!」

「うるさ……………」

不愉快な異世界転生をしてからおよそ二十年とちょっと、意外な事に俺はこの世界を満喫していた。

文明レベルは中世とかなのに現代日本と同等の医術とか衛生観念を持っており、そして基盤として魔法とかいうわけわからんものが存在している。なんかそれが文

明の要になつてゐるんだってさ、よくわからんけど。

「アッシュ!!!!!!!!!!!!!!」

今日の予定はな!!!!!!!!!!!!!!

まず、国王ヴァ

ンギヤルド様へ謁見がある。これは先日ドラゴン退治の件についてで、午後からはギルドへ顔見せに懇意にしている武具コミュニティからも契約の話が来ている。それに加えてA級ダンジョンが新たに南東に発生したようだから調査も追加だ」

「お前本当急に真面目になるのやめろよ」

「誓約だからな、仕方ない」

金髪巨乳の女騎士であり、由緒正しき騎士団出身のこいつはひょんなことから俺のパーティーへと編入された。

誓約^{ゲッシュ}とかいう制限を用いる事で己に何らかの利益を齎すハンター×ハンター丸パクリの概念が存在するこの世界では、神が与えた制約をクリアすることでその対価を得る事が出来る。どちらかと言えば黒の契約者だ。

こいつは何故か「アッシュ」という名前を呼ぶときに絶対に「!!!!!!!!!!!!!!」と勢いを付けなければいけないらしい。なんで？ 理由が意味不明だしなんでそれが判明したのかもわかんないけど、本人曰く俺に出会ったときにそう神からお告

げがあったそうだ。

嫌な神だな。

「外では極力呼ばないようにしているし許してくれ。私だって叫びたい訳じゃない」
「いいんだけど戦闘中うるさいじゃん。突然アッシュ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」
って大

声で呼ばれる俺の身にもなってくれ」

「アッシュ!!!!!!!!!!!!!!!!!! ひどい!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

うるせ〜〜〜〜!!

その呼び方の対価として岩を素手で碎けるくらいの身体能力を得る事が出来るらしい。強いんだけどさ、うーん……いやまあいいか……。

なのでこの女騎士の弱点は不意打ちである。

名前を呼ばない限りその身体能力は手に入らないからね。よくダンジョンでぶち抜かれる優秀（笑）なタンクとして重宝している。

「今私の事を侮辱しなかったか？」

「そんなことはしていないさ」

妙に勘のいい女をこの世界の誓約ゲッシュとは何の関係も無い転生特典を利用して受け流

し、起き上がって窓を開けた。

今日も風が涼しいぜ。

人々の営みが音楽を奏で文明の繁栄を如実に表すこの瞬間が好きになってきたかもしれない。

一日の始まりをのんびりと味わえる特権を手に入れる事が出来たのは、転生して嬉しかったことかもな。

「アッシュ!!!!!!……! 時間が割とない!!!!!!……!」

「もうその誓約捨てるよマジで」

すばらしきアッシュは本当に面白いので読んだほうがいいです（露骨な媚び売りと保険）

なんかちいさくてかわいいやつ

MCUのドラマ最高だからデイズニープラス入ろう！ フェーズ6まで予定立てられる最高の映画シリーズはMCUだけ！ シーハルクが待ってるぞ！

そろそろアイアンマン3更新するか……

アッシュ・ローリメント・クロフォード。

それが今世の名前だった。

灰色だなんていきなり主人公みみたいな名前を名付けられたのだが、名札と共にスラムに捨てられてたらしい。普通に酷いよね。

スラムではこれまた珍しい心優しい老人に拾われて育ったが、たぶん俺の転生特典が響いたんだろうな。

ばあちゃんだったから……

ニコポナデポチンポどれも異性なら通用する最悪の呪いと化しているが、逆に俺を捨てる事が出来た人に聞きたい。どうやればこの呪いから解き放たれるのだろうか。

「そんなこともあったような気がするぜ」

「アッシュちゃんこんにちは〜！」

「出たなメスガキ」

「メスガキじゃないもん！——もう十七歳なんで……」

「あっ……うん……」

新たに沸いてできたA級ダンジョンの調査の為に立ち寄った村で偶然顔見知り
に遭遇した。

こいつは幼女騎士と書いてメスガキと読む。

俺が勝手につけたあだ名だが、こいつがガキの頃から俺に付き纏ってきていたからそう呼ぶことにした。特に幼女は好きではない。

年齢は今年で十七、身体は誓約の影響で小さいままのこいつは初見の人間を欺くためにわざと幼い態度を取り続けているらしいぞ。神に踊らされてる奴しかいない

な、この世界。

「アッシュさんが居て良かった。いやもう本当、年齢バレた時のあの顔たまんないから。私だってやりたくないし」

「やめていいんだぞ。俺もお前に年々悲壮感が増してるのには気が付いていた」

「アッシュさん私と結婚する？」

「巨乳じゃないからやだ」

「死んでください」

ワハハガハハと二人でバカなやり取りをした。

「で、偶然でお前がここにいる訳ないな。ここの調査か」

「はい。そもそも王国にA級エージェント少ないので、私も駆り出されました」

「見た目幼女だけど扱い容赦ないよな……」

「そうなんですよね……うちの王様結構普通に鬼畜だし……」

世知辛い世の中だ。

世間では姫なんて呼ばれることもあるメスガキは俺の前だと世間を知ってしまった若者そのものに変貌してしまう。

姿は変わらないのに空気感だけが変わっていくの、普通に可哀想だよ。

「バカうるさお姉さんは？」

「口悪っ……入口の封鎖してる騎士団員と話してる。名前呼ばせようとすんなよ」
「いやだって面白いので」

頭の上に生えた耳をピコピコと動かして、獣人族のメスガキは朗らかに笑った。
うくん、それで楽しいのはお前だけなんだが。

「いつも苦勞してるんだから少しは人の苦勞で笑わないとやってられないんです」
可哀想な奴だ。

少しだけ優しくしてやろうと思った。

「アッシュ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!! 終わったぞ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「うるさっ」

「アッシュ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!! うるさいとか言うな!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

全身フルプレートに包んでいるため顔は見れないがこいつ今絶対楽しんでるだろ。

俺にはわかる。

なんだかんだ俺が嫌がる顔をするのが好きっぽいから、こういうお茶目な側面を出してしまうのだ。うんうんギャップだね、失せろ。

「む。久しぶりだな、リイン」

「デツカお姉さんもお久しぶりです」

特に他意はないが、デツカの事をデツカ……と言いつづけていたら二度と名前を呼ぶなど脅された事がある。特に他意はないのだが、身体の特定期間を見詰めてデツカ……と言いつづけたのがどうにも嫌だったらしい。ニコポナデポチンポをもってしても許されなかったもので、理由はわからないが嫌だったそうだ。

デツカ……………

「A級ダンジョン『マヤブラタスカル』、此度のお告げは比較的早い段階で届いていたらしい」

「その命名方法どうにかならんのか」

「アツシュ!!!!!!」

これは伝統!!!!!!

として伝わっている由緒

正しきダンジョン命名法だ、深く信仰を持ち誓約を一度も破ったことのない選ばれた巫女にしか出来ない儀式の末に神から啓示が降りてくるのだから、神聖なものは

疑いようもない」

この世界の神様って多分あの自動音声の邪神だろ。

目の前でちんぼぶら下げたから転生特典ニコポナデポチンポにしたのかな、俺にはもうわかんねえけど。

「一階層をうろついている魔物から察するにA級以上でなければ対処できないのは明白だ。私と、リインにアッシュ……！！！！！！！！！！　もうひとり欲しいな……！！！！！！！！」

「そんな都合よくA級は居ない。諦めて入るぞ」

「前衛三人は流石にどうかと思うんだが……」

タンク、デッカ（女騎士）。

アタッカー、リイン（獣人族）

アタッカー（？）、アッシュ（人間）

ヨシ！

「☆五キャラで固めればある程度クリアできるし、それと似たような感じで多分今回も行けるよ」

「よくわからんが……」

「たまにこういう意味不明な事言うよね、アツシユさん」

やかましい二人を無視してダンジョンの入り口に足を踏み入れた。

すばらしきアツシユは本当に面白いので読んでください！

チンポ

下痢

「アッシュ!!!……!!!」

やばい!!!……!!!」

「頑張って耐えてくれ」

巨大なオオトカゲの攻撃を一身に受け続けるデツカを横目に、俺はオオトカゲの手足にちくちく短剣を突き刺していた。

こいつがメスだったら俺のニコポナデポチンポで無理矢理攻略出来たのに、残念なことにおスだったため殺すしか無くなってしまった。ああ無情、世界は悲しい事で埋め尽くされている。よよよ。

「アッシュちゃん、全然効いてる感じしないんだけど……」

「そうとも言えるし、そうでないとも言える。物事をどう見るかだ」

「それで倒れてくれるなら文句ないんだけどね」

うむ、実際効いてるか俺にもわからない。

短剣には毒を塗ってあり、象すら一滴で致死に追い込むとかいうこれまたどこかで聞いたことのある奴を使用しているのだが多分身体がデカすぎて全然回ってないな。

「デッカ、お前どうにか出来ない？」

「出来ないしアッシュ!!!!!!!!!!!!!!　そろそろ限界!!!!!!!!!!!!!!」

「デカいのは図体だけだな」

大盾持ってたんだからもう少し堪えて欲しいのにデッカはもう限界だという。がんばれがんばれやれば出来るお前は出来る子だお前ならやれるどうすんだよそこで諦めて大盾持ったタンクなんてそれくらいしかやること無いのもう諦めたら出番がリンにしか回らなくなってお前はすぐにフェードアウトする羽目になるぞそれでもいいのか!

「アッシュ!!!!!!!!!!!!!!　　うるさい!!!!!!!!!!!!!!」

うるさいのはお前だ。

でもなんか気を持ち直したっぽいのでその間に作戦を練る事にした。

「リイン、もうちょっと効く毒作れないか」

「ええ、リインもうげんか、いい」

「使えないメスガキだな」

「ちよっと！ ここに来るまで一回も戦わなかった癖に何言ってるの！」

うわっびっくりした。

最近の若者は急に怒るから困る。

空気を紛らわせるためにボイスパーカッションで美しい旋律を奏でてやったが、リインは額に青筋を浮かべるだけだった。なぜ、わからない。こういう時どんな顔をすればいいの。

笑えばいいと思うよ。

「なに笑ってるの、早く誓約^{ゲッシュ}使ってよ」

「ええ……嫌だけど」

「アッシュちゃんの誓約強いんだからいいじゃん！」

「デメリットがデッカすぎるから嫌だよ、毒で殺せるならそれでいいじゃん」

「殺せてないから今頼んでるの！」

デツカは一人で戦い続けている。

腕がぷるぷるしているが、フルフェイスのフルプレート鎧に身を包んでいるので顔はわからない。でも多分楽しんでるんじゃないかな、アイツ騎士団で落ちこぼれだって自嘲してるタイプだから。

「ほらなんかデツカやる気っぽいし良くないか。俺はここで応援してるよ」

「ブグッハハハハハハハハ」とボーパで音を出したらリインに殴られた。

「わかりました、使います」

「じゃあ私あっち向いてるから早めにしてね」

あゝあ、くそつたれめ。

俺は異世界転生をした男だが、この世界の住人の身体に転生しているために当然の権利として誓約ゲッシュの範囲内にいる。

誓約ゲッシュも数ランク存在し、一番下からC、B、Aの三段階。

勇者特性みたいになつんよい奴とか希少な奴はSと呼ばれている。俺には関係の無い話だ。

俺の誓約は身体強化に関係する。

俺の肉体が外気に晒され数多の人間に見られれば見られる程強化されるとか言うゴミみたいな誓約。

つまり普段身に着けている鎧を外せば外す程強くなる。

Aランクに分類される俺の誓約は『露出狂』。

かつて古のA級犯罪者が使っていたという最悪の誓約だった。こんなもん抱えてたから捨てられたんじゃないか。

「よし、準備出来たぞ」

「あ、うん。……いつ見てもおっきいね？」

「筋肉のことだよな。そういうことにはしておいてくれ」

リンはそっと目をそらした。

が、逸らしつつ横目で股間を凝視しているのには気が付いている。

それは仕方ない事だ。

だって俺、転生特典でニコポナデポチンポが付与されてるし。

全裸になればチンポによって異性を虜にしまうため、敵がオスの魔物であり

尚且つ周囲にパーティーメンバー以外誰も存在していない状況を整えなければいけないクソ性能だ。

前に一度街中で全裸になった時は大変だった。

守衛は俺を捕まえようとするのに奥様方や女学生が必死になってそれを止めるからな。この誓約の説明をしてなければB級犯罪者くらいにはなってたかもしれない。なおその時に会ったのがデッカである。

互いに「デッカ……」と言ったのが始まりだった。

「デッカ！ どけろ！」

「アツシュ!!!!!!!!!!!!!! 　でかい!!!!!!!!!!!!!!」

「やかましいわ」

あくもうホントくそ。

身体能力に身を任せてオオトカゲの頭を上からぶん殴る。

地面と激突した際の衝撃で息子がブラブラ揺れるが息子自体も強化されているので無問題。風圧に身を委ねて元の場所まで戻り、リインが拾ってくれた俺の鎧をいそいそと着ていく。

「流石は灰の全裸エージェントだね」

「それ何一つとして褒めてないから。どうせなら天下一品のボイパ職人くらいの感じで呼んでほしい」

「世間では夜のベテランエージェントなんて呼ばれ方もしてるぞ」

下世話すぎね、この世界。

そしてこのニコポナデポチンポにはある一つの欠点がある。

長所でもあり短所でもある最悪の点、それは……

「……………ね！ アッシュちゃん、今日ご飯行こうよ！」

「む、駄目だぞリイン。私が行くんだから」

「なら三人で行こつ！ 我慢できなくなってきた」

チンポを見せた異性に対して催淫効果があるところだ。

俺の童貞？

育てのばあちゃんに奪われました。

熟練のテクニクだったけど、正直二度と味わいたくない苦い思い出だ。

TS 悪役令嬢神様転生善人追放RTA

チーレム杯の頂点に立つ！

頂点

ちよ、チヨゲブリャアアアアアアアアアアアア！

下痢とはかくも儂きものか

「アッシュ・ローリメント・クロフォード殿はいらっしゃいますの!？」

ドバタン！ と音を立てて酒場へ突入してきた謎の声。

なぜか俺の名前を呼んでいる様な気もするが、こんな声の持ち主に知り合いは一人もいないので無視する事にした。宗教勧誘とかが禁止されてるこの国でその手の奴がいるとは思わんがマルチ商法は存在するからな。近寄らないのが正解だ。

「おいアッシュ、お前に客だぜ」

「おいアツシユ、また手を出したのか」

「おいアツシユ、このクソ男が！ チンポちぎるぞ」

千切れるもんなら千切って欲しい。

神様からの贈り物だから無駄に耐久力が高いのだ。言うなればマジカルチンポだな。ふざけやがって……

ハゲ三兄弟が俺の名前を晒してしまった所為で騒がしさの元である謎の女が俺の元に足早に駆けて来た。折角女のいない酒場でのんびり酒飲んでたのに……

「あなたがアツシユ・ローリメント・クロフォード殿ですわね！」

赤髪でなんか強気そうな目付き、お嬢様みたいな言葉遣い。

あゝ、厄介事の香りがしてきた。

こういう時は黙ってあしらうのが大人のやり方だと以前国王様と酒飲んだ時に聞いたのでそれに倣う事にしよう。

「いえ、メツシユです。勘違いではないでしょうか」

「あ、あら？ こちらの酒場で食事をされているとパーティーメンバーの方からお聞きしたのですが」

「俺のパーティーメンバーはチツサとマダムなので別人ですね」

「そうですか。それは失礼いたしましたわ」

バサアツと優雅に髪の毛をファサツとやって出て行った。なんなんだあいつ……

「おいアツシュ、もしかしてあの女……」

「知らない。逆にハゲ三人は知ってるのか」

「ハゲじゃなくてスキンヘッドだ！ あいつはカトリーヌ・ピースラウンド、世

界に7種しか存在しないとされているS級の中のS級、SS級誓約ゲツシュ保有者！」

東京グループでもそこまで滅茶苦茶じゃないと思うよ。

「——流星のピースラウンド！」

「……て事があったんだが、誰だ？ 俺を売ったのは」

「私じゃないぞ。私はその頃家でのんびりムフフとしていたからな」

「その情報は要らないが、デッカがクソむつつりだという事は知ってる」

改めてパーティーメンバーで酒を飲む席を設けた際に聞いてみた。

今回はフルメンバー揃っている。

「さあ………アンタに興味なんて全然ないし。アタシがアンタの行動把握してる訳無いじゃない」

この微妙に辛辣なのはスカーレット。

苗字は公開しておらず、単純にスカーレットと呼びなさいとだけ言われている。パーティーに入ったのは偶然俺の裸を見たからだ。

「ンン？ もしかして私を疑ってるのかい？ それは心外だなあ！ 私ほど君の事を考慮して日常を過ごせるように努力している女はいないというのに！」

コイツはアイリーン・ドゴドゴ・バフメナツシュ。

ふざけてる名前にしか見えないが、実際ふざけて名乗ってるので本名は誰も知らない。女にしか見えないが男だ。俺のニコポナデポチンポが効かない上に一緒に風呂に入った時にチンポあったからな。

「まあ私が売ったんだけどね」

「そうだろうと思ったよアイリーン。お前くらいしかそう言う事をしない」

スカールレットは本気で俺のチンポ以外に興味ないし、デツカはなんだかんだ俺のことが好きなので本気で困ることはしない。

リインはそもそも知り合いとかそういう立場なのでパーティーメンバーではない。

「なんか君に決闘を申し込みに来たらしいよ」

「SS級なんて揶揄される誓約ゲッッシュ持ってるやつに勝てるわけないだろ」

「いや君去年他のSS級倒してるよね」

そんなことあったっけ？

「ホラ、テロ起きた時に」

……………ああ……………あの時の……………

「斬撃ゲッッシュの誓約持ち相手に二時間粘った挙句全裸になった途端覚醒して勝利した灰の
エージェント、なんて呼ばれ方をされてたよね」

「何もよくない」

あれは偶然の勝利だ。

男性のチンポを斬ることに執着を持つSS級の犯罪者がたまたま俺が滞在していた街でテロを起こし、その最初の被害者として俺が選ばれて、神様から与えられたチンポだから斬ることができなかったというオチ。

でも最初から全裸だったので俺の誓約ゲッシュのおかげということになった。

「君、結構注目株だよ？」

「肝に免じておこう。あ、すみません、砂肝ひとつください」

店員のお姉さんにニコポを仕掛けたところで、扉がドガシャアン！ と開かれた。

このパターン先日もあったよな。

「——御用改めですわ！」

ジャンジャンと銅羅を鳴らしながら（後ろにピツタリ歩いてる謎の女同伴）、先日も顔を合わせた赤髪の女が威風堂々と闊歩している。

「アツシュ・ローリメント・クロフォード！ 先日は良くも騙してくれましたわね」

俺の方を見ながら俺の名前を呼ぶものだから、つい後ろに振り返ってしまった。

「あなたの事です」

「壁に話しかけるなんて奇特な奴もいたもんだ」

ちなみにデツカはテーブルに残っているがスカレットとアイリーンはどこかへ消えた。巻き込まれたくなかったんだろう、俺もやだ。

「改めて初めまして。私、カトリーヌ・ピースラウンドと申します」

「メツシュ・バーンデットだ」

「次嘘を吐いたらぶん殴りますわ」

「アツシュ・ローリメント・クロフォードだ。初めまして」

キラキラ煌めいている拳をグツと握りしめながらカトリーヌ嬢は語った。

「私と決闘をして欲しいんですけれど」

「理由は」

「私が最強だと証明するためですわ」

ええ……俺はただのA級エージェントなんだが……

「斬撃の誓約持ちを打ち倒したと聞きました。それはつまりあなたを倒せば実質的に斬撃の誓約持ちのあの女と戦ったという証明になりますゆえ」

「今監獄にいるんだっけか。良いじゃん連れ出しちゃえば」

「良いわけないだろう……」

デッカから援護射撃が入った。

お前はどっちの味方だ、俺の味方しないならお前の持つてるおもちゃ全部取り上げる。

「すまない、カトリーヌ・ピースラウンド殿。現在こいつは王国から特務を承っている状態で、おいそれと私闘をできない立場なんだ」

「えっ……そうなの？」
素が出たな。

「ああ、残念ながらそういうことになっている。悪いな」

カトリーヌはしょぼく帰っていった。

「……デッカ。俺っていつの間の特務受けるようなエージェントになった？」

「アッシュュ!!!!!!!!!!!!!! お前はバカ!!!!!!!!!!!!!! だが、それはそれとし

て年若い女性がお前に墮とされるのを黙って見過ごすのは意地が悪いだろう？」

へへ。

そういうもんか。

「ああ、そういうものだ。あと解釈違いだし」

？

どういう意味かを聞くより先に戻ってきたスカーレットとアイリーンに妨害され叶わなかった。

面白かったら評価お願いします!!!!!! お願いします!!!!!! 清
き一票を!!!!!!!!!!!!!! 純愛だよ

TS はホモだろ

おばあちゃんが夜なべして最新話を書いてくれました。

おばあちゃんは付けられた低評価に泣きながらしようがないわねえと言っていました。

こんな非道が許せるのでしょうか。

ゴールデンカムイの続きはもう無いけど次は多分スパイファミリー書くよ。

ハーメルンのスパイファミリーと恐れられたTSRTA書籍化おめでとうございます！媚び売ったから許してね

「うーむ、中々上手くないかねえ」

「そう上手くいくようなもんでもないだろ」

今日はアイリーンの研究室に手伝いとして駆り出された。

こいつはB級エージェントだが、戦闘以外に貢献できる部分が多く、国から特殊指定エージェントとして承認されている。俺のパーティーに居るのは面倒がないかららしい。

「性転換させる薬が完成すればこの世界を支配できるのが君になるんだが」

「俺に何を背負わせようとしてんだ、やめろよ」

たしかに理論上女だけの世界になれば俺が支配者になれるが……

「その傍らで私達初期メンバーが甘い蜜を啜る、というわけだ。天才の頭脳だねえ」

「俺だけが苦労しているぞ」

「何人抱こうが疲れない病気持たない衰えない最強のチンポ持つてるくせに何言ってるんだ」

チンポは疲れなくても腰は疲れんだよ。

俺は気絶してもチンポはピンピンだよ。もうこれじゃ肉デイルド扱いもやむなしなんだよね。スカレットはその状態が一番好きらしい、アイツ本当に俺に興味ないよな。

「チンポしか強くない訳じゃないってのが君の面白い所だ。前世でズルした？」

「ズルはしてないが選ばれし者だと自覚はしてる」

「ふうん、実に面白い。その内教えてくれたまえ」

異世界転生って知ってるか？

上条当麻だから許された熱膨張は恐らく俺だと許されない。

チンポがピンピンに膨張するのは熱膨張しているからだ。なんならハルクの筋肉がムキムキなのも熱膨張するからだし、熱湯かけたらチンポは膨張して壊れてしまう。理論が破綻してしまった。

「生物学上現在判明している人類とほぼほぼ差がないのにどうして君のチンポはそんなに強いんだ？」

「あのさ、チンポに話しかけるのやめてくれないか。せめて俺の顔を見ろよ」

「男に顔見られて嬉しいと」

「お前顔は女じゃん。勃たないけどそれなりに嬉しい」

「正直な奴だな……」

苦笑いしながらアイリーンは顔を覗き込んで来た。

「私は自分の事を女だと思っているが、君はそうではないと言ったな」

「……ああ、そんなこともあったな」

お前が本当に自分を女だと思ってるならきつとニコポナデポチンポが通用した筈だ。

たぶん。

きつと効いたと思う。

いや確証無いから何とも言えないけど。

「その理由はまだ教えてくれないのか？」

「教えて欲しいのか、意外だな」

「自分の心に決着を付けたいと願うのは悪い事じゃないだろう」

膨らみのない胸を抱きながらアイリーンは言った。

俺はそういう気持ちを抱いたこと無いからわかんないや。

産まれた時から男だし、そういう人には同情するけど至極どうでもいい。女なら抱くし男なら放置、それ以外に何の選択肢がある。中世でもここまで最悪な倫理観してねえな。

でも強さは変わらないけどチンポ斬らないと体臭が酷くなる誓約結ばれたアイツ

は可哀想だと思った。抱いたよ、めっちゃ臭かった。

ああ、そういうことか。

答えはエタ、これから頑張っていくよ、アイリーン。

「よし、抱こう。エッチした結果でわかる筈だ」

「正気か？」

「正気だとも。お前は顔が女、つまりかわいい、つまり女。乳が無くてチンポが生えた女だと思えばいい」

もう何でもよくなってきたな。

転生特典とは名ばかりの呪いに身を蝕まれているような気がするが、病気すら貰わないしまあいいか。

「そしてチンポという分野に関して俺は世界で最強を名乗ってもいいくらいの強さがあるような気がする。だから俺が男でお前が女だ」

「すごく滅茶苦茶だ……ロジックという言葉からここまで離れた文章もそうないぞ」

SS級の女ですらあひんあひんだったんだからまあ最強でいいだろ、たぶん。雌ドラゴンまでならエッチできたし気持ち良くさせられたから多分セーフだ。因みに

その後ブレスを食らって鎧が溶けたが誓約ゲッシュのお陰で無事だった。

ドラゴンテールは美味しかった。

ムードを盛り上げるためのボーパでぐぐぐ言ったがアイリーンは冷めた目で俺の事を見ていた。

「……………チンポだけの男に抱かれるの、ムカつくな」

「今更か。どういう男になら抱かれないんだ」

「そりゃあ勿論男らしくて頼りがいがあって包容力もあって欲しい時に欲しい言葉を言ってくれる完璧な男だ」

スパダリにはなれねえよ。

マジカルチンポなら持つてるけどな。やかましいわ、デッカ召喚するぞ。

「ちょっと待て。こ、このままするのか？」

「めんどくさいしこのままでいいよ。どうせチンポ入れたらぐしよぐしよだし」

「最悪だっ！ くそっ、こんな男選ぶんじゃ——」

因みにこの後作った薬が成功していたらしく、三十分だけ性転換したアイリーンをぐちよぐちよにした。

ニコナデポ・チンポマン

ごめんみんな、チートハーレム杯の頂点は獲れそうにない。

規約違反の低評価が来たけど規約違反スレスレを歩いてるのが誤魔化せないから勝ち目がないんだ。

みんなで餓狼を応援しよう!!!!!!!!!! ハッハッハッハッハッハッハッ

ヤッ—————!!! ユニコー—————!!! 俺は行くよ—————!!!

パチンコやってないけどこんな感じで合ってる？

長閑な風景、聳える山々、吹き荒れる暴風、空を駆け回る巨大な影。

ブオオオオオオなんて大声を上げながら空を自由に走り回るその姿はまるでドラゴンのようで、というか完全無欠にドラゴンだった。

「なんでこんな田舎にドラゴンが……」

「田舎だからだろ」

たまにしつこくやってくるカトリヌ嬢を適当にあしらいつつ、軍資金が底を尽きてきてしまったので働くことにした。ドラゴン一団殺すだけでそれなりの金が貰えるんだからチョロい世界だよな。なお最上位の強さを誇る奴らがマジでヤバいので全然安全じゃない模様。

「デツカ、お前あれと打ち合えるか？」

「次の瞬間には肉片になってるだろうが可能だ」

「それは可能とは言わないんだなあ」

一応デツカは国に所属するエージェントの中でも有数の硬さを誇るんだが、それでもドラゴン相手に持たせるのは厳しいらしい。

俺は全裸になれば問題ないけどね。

これがA級誓約ゲッシュの力って訳だ。

でも全裸になったらその後周囲の女全てを抱く必要が出てきてしまうので、これの何が最悪かというと、虫の雌すら俺に近寄ってくることなんだよ。

虫は無理だよ。

どう頑張っても無理だよ。

俺の事を認識しないで貰っていいかな。

「スカーレット、撃ち落とせるか」

「鱗一枚くらいなら削れるわね」

「逆鱗に触れるとドラゴンは怒り狂うらしいからやめような」

まあそもそもドラゴンってS級担当案件らしいから、俺達A級エージェントパーティーが来ること自体想定外なんだが。

じゃあ何故受けたのだった？

そりゃ支払いがとんでもなくいいからだ。こういう理由で命を落とすのは基本的にC級以下のアマチュアだが、俺はA級だからそういう死とは無縁なワケ。

いざとなったらチンポ振り回して倒せばいいし。

「アイリオン、なんかやれ」

「雌にでもして君との交配観察でもしようか」

「もうお前は何もしなくていい。Qのシンジくんより使えない奴だ」

まあこうなることは理解していたから今回は秘策を用意した。

後ろに振り返ると、強力なドラゴンが空を飛びまわり火を吐き威嚇を繰り返しているのに呑気にトランプに興じている奴らが居る。

「おいお前ら、一応言っておくが……」

「今いい所だから黙ってて」

赤髪の女に黙らされた。

「……………どっちだ……………」

「…………ゴクリ」

ババ抜き勝ち抜きトーナメントは早くも佳境を迎えている。

これで負けた奴は今日の晩飯奢りとかそういう賭けでもしてるんだろう。まあ長旅だったし最終決戦に移行しててもおかしくはないな、全部俺がぶち壊しにするけど。

我関せずといった様子でバチンガタンゴトと音を立てながら鎧を脱いでいく。

因みに全員女だ。

はい、もう何が起こるかは予想できませんね。

「あゝーっ、何脱いでんの！ 今忙しいって言ったでしょ！」

「よし、ドラゴン討伐と行こうじゃないか」

「うわっ、デッカ……じゃなくて、うわ……」

もう慣れたもんだ。

全身に容赦なく振りかかる自然の風、股間に釘付けになった他人の視線、何故か向上する俺の身体能力。

誓約^{ゲッシュ}なんて意地悪いシステム作った邪神は本当に滅べばいいと思う。

全裸になり戦闘態勢を整えた俺に危機を感じたのか、ドラゴンは真っ直ぐ此方へと羽ばたいてくる。

既に俺の周りにいた筈のパーティーメンバーは全員後ろに下がっていた。心配するという概念が少しも見られないので、こんなチート持って転生したのに全然好かれてない感じがする。チンポは好かれてるけど。

全裸でチンポブラブラさせてるような男に討伐されてしまう舞台を整えてしまったお前が悪いんだ。街中とかに出没してたら俺じゃないS級の化け物が出勤して終わりだが、こんな田舎で他の目線が無い場所だからお前は俺に負ける。

衝撃波と共に飛び込んで来たドラゴンの頭突きに対して全力のパンチを合わせ、

ドラゴンの身体が吹き飛んだ。

飛び散る血肉が辺り一面を真っ赤に染め上げる。

俺は当然真っ赤だ。トマト投げ祭りでもここまで綺麗なレッドには染まらないだろう。ドラゴンの血、獣くさ……

「アッシュ!!!!!!!!!!!!!! おつかれ!!!!!!!!!!!!!!」

「労うだけでこんなにいるさいのはお前だけだと思う」

「アッシュ!!!!!!!!!!!!!! ひどい!!!!!!!!!!!!!!」

そうか……ひどいか？

スカレットは心底興味無さそうに俺の顔を見た後、顔を赤らめながら股間を見詰めた。ちょっと衝動に直球過ぎるな、こいつ。

「セラフィムの皆も助かった。こいつら三人だけのバフじゃ殴り勝てるか不安だったからな」

「……え、あっ。いいよ別に気にしなくて」

セラフィム、A級パーティー。

構成員は全員女、アイドルグループとして世に知れ渡っている。実力より広報と

いう面での起用なので、リーダー以外は強さ的にはB級くらいです。

リーダーの赤い髪をした女、レティシアは呆けた表情で言った。

「……アッシュ、噂通りのいい腕だ」

「褒められて悪い気はしないが、チンポを見詰めるのはやめてほしい」

いそいそ服と鎧を着こんで帰還の準備を整える。

ここまでの移動に馬車で五時間、ドラゴン討伐に一分、これは考えたら虚しくなっちまうやつだな。

「五時間馬車の中、か……」

ああもう嫌な予感がする。

具体的には周りから俺に纏わりつくじめついた視線。

より正確に言うならば、股間に釘付けになった数多の視線が原因だ。

もう寝てる間に勝手にチンポ使ってくれねえかな。

エッチすぎてやる気も無くなって来てるのにチンポだけはいきり勃つのが本当に嫌なところだった。

感想ありがとう!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!! 低評価は要らないから高評価よ

ろしく!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!! (もしもこれが規約違反だった場合この小説は消えます)
蝉って一週間しか外で生きられない悲しい生命体ですよね。

青木ルリもそういう子です。

かわいいね。

そんなわけあるかっ

賭ケグルイカイジ 　　（盾の勇者の成り上がり）

チートハーレム杯も既に佳境、日間ランキングを我々が支配する日も近い。

ニコポナデポチンポの名前を上位で見たいな！。

冷静に考えたけど低評価爆撃する奴らが許されてるんだからこれくらい許されて当然だよな。

皆もそう思うだろ！！！！

これはハーメルンの総意だ！！！！！！！！

この世界で一番自由な奴がハメ俗王になれる！！！！！！！！（ド！！！！！！！！

TSRTA作者さん！　メス堕ちさせようと思ったけど踏みとどまったから許してね！！

そもそも名前が違うんだから別人だろ

クツキングパパのちいかわと同じだから

「へっへっへ、アツシユさんよお。今日がお前の命日になるぜ！」

そう言いながらナイフをペロペロ舐めまわし机に張り付いている男、スネークイーターはルーレットを回した。

先日のドラゴン退治で手に入れた金をさらに増やすべく王都の賭博場へと足を運んだら絡まれたのだ。

女相手ならどうとでも出来るのに男が絡んでくるのがウザい。

これだけ聞くとめっちゃ最低な奴に聞こえるじゃん。ウケる。

「黒！ 黒の7！！ 俺にはわかる！！！！ ルーレットの悲鳴が聞こえるぜええええ！！」

「病院行け」

赤の4番に珠は収まった。

俺は赤に賭けていたので普通に勝った。

スネークイーターは少しテンションが下がっている。

「なあ……一点賭け、しないか？」

「しない。堅実に行く」

「賭け事に堅実は無いだろ」

急に正論で殴るなよびっくりするだろ。

半日粘って元手の二十倍に増やしたがそろそろ潮時かね。たまに負けてやっ
てから許されてるが、収支は圧倒的にプラスに傾いてる。

節度を持って引き摺りだすのが運営との正しい付き合い方だからな。

「——そのあなた、もしよろしければ私と一賭けどうですか？」

スネークイーターを無視して立ち上がりその場から離れた俺に声を掛けて来たの
は見知らぬ女だった。

黒い長髪に整った顔つき、豊満な身体は女性としての魅力がかなり揃っているよ
うに見える。

初見でそういう風に見えた女って大抵ロクでもないんだけど大丈夫かな。家帰っ
てデッカとバカな話したいんだけど。

「私はユメコ・ジャバミ……この国営カジノで覇者として名を轟かせている者です」
ユメコ・ジャバミ？

思いつきり日本人の名前何だけど、もしかしてこいつ転生者だったりするのか？

まあ女だしどうでもいいけど。乳が付いてて顔が可愛いから女判定で俺のチンポが火を噴くのは確定しているので、美人局の可能性を踏み倒して近付くことにした。

「そうか。初めまして、アッシュ・ローリメント・クロフォードだ」

「あら、あなたが……これは失礼いたしました」

「ただの A 級エージェントに敬意なんていらん。なにでやる？」

スネークイーターボコボコにするのも飽きてたからな。

ここに常駐してるくせに一点賭けしかないから雀るの余裕なんだよね。負ける事は気にせず一点で当たる快樂を求めるマジのヤバい奴だ。

「では——ジャンケンで行きましょう」

「なんでカジノでジャンケンなんだ……」

「敗者が勝者の奴隷になるジャンケンですわ」

ユメコの口元が弧を描く感じに割れていった。

「三回勝負、多く勝った方の勝ちという事で」

「つまり二回勝てばいいんだな」

「そういうことです」

俺はここで少し悩んだ。

もしも負けてしまった場合本当に奴隷になってしまう。

チンポ見せれば奴隷から脱却できるのはわかっているが、他人に付き従う立場は好きじゃない。

他人を隷属させる方が好みだ。

よし決めた。

「…なぜ鎧を？」

「全裸の状態が一番強いから」

まあチンポで懐柔するつもり満々なんだけど。

「よし、待たせたな」

「で、出たぞ！ アッシュの本気モードだ！」

「全裸必勝のアッシュが脱いだだど!?」

「お嬢ちゃんチンポ見るなー！ 見たら負けるから！」

残念なことにユメコの視線はチンポに釘付けである。

ニコポとナデポも強いんだけどチンポが凶悪過ぎて全然使わないんだよね。

ニコナデポ・チンポマン改め全身チンポのチンチンの実能力者です。

「さて、負けた方は奴隷になるんだったな」

「え、ええ……………」

ユメコはチンポをみつめている。

「なら俺は奴隷になりたくないし、言い出しっぺの法則だからお前に負けて欲しい。グーを出せ」

「……………仮に他の手を出したのなら？」

「これであひんあひん言わせてやるよ」

チンポをブンブン振り回して威圧する。

国営カジノで全裸になるのは当たり前前だがいい事ではない。今も警備の連中が俺達の様子をうかがっている。

でも全裸になる事で逆にイカサマは無いから全裸になっているという事実以外で俺を捉える事は出来ず、また、真剣勝負に本気になるためだと建前も立てているか

ら迂闊に手を出せない。

これが大人のやり方だ、バナージ。

「勝っても負けても言わせてやるけどな。はい最初はグー」

ユメコはワntenポ遅れてグーを出した。

俺はこの時点でパーを出した。

「なっ……!!」

「おお、約束通り出してくれたな」

「そ、そんな、なんで……っ、まさか、私の誓約ゲッシュが!?!」

いや知らんけど。

なんか一人で怖いてる。

最近の若者は怖いなく。

「いいや、違う……これは誓約ゲッシュの方ではなく……カイジの方が悪さをしている……

？」

ブツブツ呟くユメコの事を無視して、そのままジャンケンを続行した。

「はい最初はグー」

「あ、ああっ！ お待ちになって！」

「待たない」

ユメコはグー、俺はパー。

完膚なきまでに叩きのめして俺は奴隷を一人獲得することに成功した。

「脱げば脱げだけ得をする。すばらしい世界だ」

「おいアツシュ！ その女にめっちゃ負けたからちょっと貸してくれ」

私怨タラタラのスネークオーターが駆け寄って来た。

俺に負けるのとは比にならないくらいボコボコにされたんだな、かわいそうに。

「ユメコ、いつまでもチンポ見てないで奴隷の挨拶でもしたらどうだ」

おお、異世界で奴隷とかそれっぽいじゃん。

盾の勇者も奴隷持ってるし硬派で面白いと言われるならう系にどんどん近付いて来たんじゃないの。盾じゃなくて振りかざしてるのは肉槍だけど、チンポの勇者で

いいか？

「……………やしい」

「……………あ？」

「……悔しい」

どこかで聞いたことのある声真似を披露しながらユメコが立ち上がる。

相変わらずチンポを見ているが、そういえば先程なんて言っていたかと思いつく。

カイジの方が悪さをしている。

俺はカイジでもなんでもないし鼻も長くない。

「悔しいっ……!!」

ユメコが顔を上げた。

その顔は恍惚と言わんばかりの喜色が溢れていた。

うわ、完全に発情してる……

でも言ってる台詞は完全にカイジだ……

「だが、これでいい!!」

何が良いんだよ、適当に挟み過ぎだろ。

「いえ、解釈違いですがこれもこれでいいかなと思ひまして」

「急に冷静になるな、びっくりするから」

「私の特典に敬意を表したのですわ」

へー。

……………ん？

「今特典って言ったか？」

「ええ。転生特典ですの」

は？

「タグで言うなら転生者複数ですわね」

「誰もそんなことは聞いてないんだが」

「私は賭博黙示録カイジの能力が賭博時に使える感じですよ、おまえはトリコ？」
化けの皮が一気に剥がれすぎだろ。

俺以外にも居たんだなあ。

まあ居るか。俺だけがガチャ引いた訳じゃないだろうし。

「俺はニコポナデポチンポ。制御不能のクソ特典だ」

「女の敵ですわ……………」

「それは間違いない」

転生者仲間の奴隷を一人確保した。

感想評価ありがとうございます………高評価ありがとうございます………
高評価ありがとうございます………感想もありがとうございます………ちゃんと全部
見てるよ………アッシュ………頑張れ………

真の實力はギリギリまで隠しておくべきだったかもしれない

最近のハーメルンの流行に合わせて研究し尽くした結果決定したタイトルニコポナデポチンポですが、おばあちゃん曰く「アホ長いなろう小説みたいなタイトルにしろ」と言われました。でも今一位を独占してる彼若しくは彼女は違います。そしてこの作品も違います。

じゃあなんで低評価が入るんだ？

文字数制限かけて十文字以上じゃないと評価入れれないようにしてやるよ！……！！
オラ！……！！……！！……！！……！！……！！……！！……！！……！！……！！……！！
これが答えだ！……！！……！！……！！……！！……！！……！！……！！……！！……！！
低評価なんか要らない！高評価だけが欲しい！みんなそうだろう！！ハーメルンの便所にだって人権はある！！許可取ってないけど感想くれたから実質公認！！初めまして便所さん……！！……！！……！！……！！……！！
見てくれよ主催者！……！！……！！……！！……！！……！！……！！……！！……！！……！！
クサヴァーさん！……！！……！！……！！……！！……！！……！！……！！……！！……！！

「アッシュ!!!!!!!!!!!!!! 客人!!!!!!!!!!!!!!」

同じマンションに暮らすデツカが合鍵を用いて叩き起こしてきた。今何時だと思ってるんだよ。

「もう昼だぞ」

「休みの日だし」

「今日は平日だぞ」

「……今休みになった」

ニッコリ笑顔のデツカにベッドから引き摺り出され無理矢理身支度をさせられた。あく、奴隷にしたんだから部屋に連れ込めば良かったな。

「よし、こんなもんだ」

「割と世話焼きだよな」

「嫌いではないぞ」

「さいですか。」

のんびりあくびをしながら部屋の扉を出る。

いつもの鎧はつけてない。

デッカにもわかるように伝えてやれ。デッカは乳と図体と声はデカいが思いの外
思い詰めやすいタイプだから、お前の能力が欲しい。今すぐ俺の仲間になってくれ。

「し、支離滅裂：ここまで滅茶苦茶な人は初めてよ」

「頭がおかしくないと街中で全裸にはならないだろうな」

デッカ、余計な事を言うな。

その無駄にデカイ乳をもぎ取るぞ。

「ンンっ。アッシュ・ローリメント・クロフォード、あなたにある話を持ち込みに
来たのよ」

「悪いが俺は特務エージェントだから個人協力は出来ないんだ」

「嘘ね。『嘘だよ〜ん』じゃないのよ」

なんだと、人の心が読めるのか!?

「頭おかしくなりそうだわ…」

「病院行け」

「もうやだこの人…」

結局女は名乗ることなく何処かへ消えていった。

「…おいアツシュ!!!!!!」　　なんであんな態度!!!!!!」

「明らかに厄介事の気配だったからな。追い払った」

先日奴隷にした女が転生者だったことで俺の身の振り方が変わった。

転生特典を持ちながら誓約ゲッシュを持つヤバい奴が俺以外にもいるかもしれない。ていうかいる。ニコポナデポチンポを越える酷いのがいるとはおもわないが、二次創作のオリジナル主人公みたいな奴は確実にいる。

主人公たちの世代より二つくらい上に生まれてめっちゃ強く生まれて強さを見せつける奴とか流行りだよね。

「めっちゃ武闘派のオリ主に絡まれたら死ぬからな。近寄らないのが吉だ」
件のカトリーヌ嬢はなんか堕天使の王と戦ったらしい。

死に掛けのズタボロ雑巾みたいな恰好でぶっ飛んできた時は何事かと思っただが、ああいうSS級誓約ゲッシュ持ちで尚且つ転生特典持つてるような化け物と戦うことになったら命が幾つあっても足りないだろう。

女にはめっばう強いが男相手には全裸になる以外の選択肢がないから、俺。

「俺は今くらいの立場で満足してる。だからこれ以上は迷惑だ、いいなデッカ」

「…お見通しか」

「当たり前だ。お前は事あるごとに俺を立てようとする節がある」

それも俺が死なない程度の奴から死ぬだろうと思えるものまでピンキリだ。

デッカが俺に何を求めているのかは知らん。

いっそのことスカーレットくらいわかりやすかったらいいのにな。

「俺は俺の望む形でしか力は振るわない。チンポばかり求められているのはわかっているしそんな中でお前だけは俺の事を求めているのもわかっているが、そう簡単に応える事は出来ない」

だってチンポ最強だし。

ニコポもナデポも全然使わないのにチンポだけは毎日使ってる。

乾く暇がないって現実にありえたんだな、ハハッ。

もう暫くエッチしない環境に身を置きてえよ。

もっと考えて力を振るえばこうはならなかったかもしれない。でもそうはならなかった、ならなかったんだよ、ロック。

「さ、家に帰ってスケベしようぜ。世界の危機とか陰謀とかどうでもいいし」

シン・ニコポナデポチンポ

評価者数99999人、お気に入り100万、UA一千億の超人気企画チートハーレム杯完結!!完結もして、人気も取って、もしかして俺ってチェインソーマン!? 感動の最終回だぞ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!! みんな!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

あとこの小説は企画終了と共に爆散するので今のうちに楽しんでおいてね、ハーメルンの便所さん!無許可だけど遊ばせてくれてありがとう!!サイゲームズさん!!!!!! 大好きです!!!!!! テイルズオブシリーズの技だけクロスしたかった!! 俺は……よわい!!!!!!!!!!!!!! 主催者様!!!!!!!!!! ごめんなさい!!!!!! でもチートハーレムしたし赤い髪の女出したしTSRTAの主人公もチン負けさせたから許してください!!!!!!!!!! 読んだら高評価お願いします!!!!!!!!!!!!!!

あの日々から早くも数年が経過した。

紆余曲折あり結局転生者達に目を付けられた俺は、最強の転生者を決める死ぬほどどうでもいい戦いに参戦することになってしまった。

織斑一夏みたいな名前をした奴が乗る異世界スマホのロボットと戦ったり、分解と再生が使えるお兄様みたいな奴と戦ったり、貞操観念が逆転してる地方で領主を務めてた奴と戦ったりTSした聖女様と戦ったりと大忙しだった。

まあ全部チンポで薙ぎ倒したけどな。

あくまで奴であり何故か全員女だったので俺が勝利を収めた。

鎧を段階的に脱いでいくことで最強フォームに変身し毎度の如く発情した女との戦いはそれはもう苦しいものだった。カトリーヌ・ピースラウンドも勿論頂いたが？　もうどうにでもなっちまえ。

「やれやれだぜ」

「アッシュ!!!!!!!!!!!!!!　　仕事!!!!!!!!!!!!!!」

「すこしくらい休ませてくれ。昨日もお前らに集られてた所為でボロボロなんだ」
チンポ以外が。

もう俺のチンポは無敵だからいつでも勃起可能の最強チンポだが、身体はそう

じゃない。もう動かしたくないくらい疲弊してるのもうチンポ外せねえかな。

「国王としての自覚を持ってと言っているだろう」

「なんで俺が国王になってんだよ……」

一年前の最強転生者決定戦で勝ちぬき全員と仲良くにゃんころしてしまった所為で勝手に推挙されてしまい国王へと成り上がってしまった。

「国王様！ 大変です!!」

「今度はなんだよ」

「外！ 窓から外を！」

言われて見て見たら王都にデッツツツカいロボットが出現していた。

どこからどう見てもエヴァンゲリオンだが？

「何がどうなってんだよこの世界……」

「私にもわかりかねますわね」

いつの間にか隣に来ていた奴隷のユメコが呆れながら同意を示した。

あの邪神好き勝手やりすぎだよな。

そろそろ天罰を受けて欲しい所だが、天罰を与える側だから質が悪い。

「おい王様！ 変なロボット出て来たぞ！」

そう言いながら走り込んで来たのは転生者仲間のメアリー・スー。

転生特典としてサムライ8の語録を話している時だけ無敵になれるらしいのだが、チンポの前にあえなく決壊した可哀想な女だ。赤髪爆乳ということにでもしておこう、満足してくれ主催者。

「ああ、どうにかしてこい」

「らしくなってきたな、王様」

そう言いながら無敵の力を宿して窓から飛んでいった。

王都には定期的に転生者が出現するのでこうなりがちだ。

スパロボとかそろそろ開戦できるんじゃないかねえか、スーパーロボット大戦チンポで行こう。

「……そういえば王様」

「どうしたユメコ」

「いえ、エヴァンゲリオン初号機って人造人間でしたっけ」

「さあ……俺、エヴァは破しか見たこと無いから」

「なんて中途半端な人間なんですの……」

話題になってた時に破を映画館で一回、あとQの冒頭映像を見ただけ。シンジくんが主人公で眼帯付けたアスカって女の子を食べた筈なのにQで出てきてよくわからなかった。

「エヴァって完結したの？」

「しまったわよ、シン・エヴァンゲリオンって名前で」

「マジで言ってるのか」

俺が死んだのは大体2017年くらいだったような気がする。その頃にやってたのかな。

「話を戻しますけど、エヴァンゲリオンは正確には人造人間なんですの」

「ほお」

外では高速で飛び回る奴らとそれを手で掴んでぶん投げたり叩きつけたり食べてむしゃむしゃしてるエヴァンゲリオンが居る。

原作再現じゃん。ヤバW

「あら、死にましたわね」

「どうせ転生するだろ」

ぶっちゃけ一度死を経験してしまったのに転生できるという前提があるので俺達は非常に死に対して冷めた感情を抱いている。

だってまた転生させられてるかもしれないじゃん。

なのに一度の死を怖がってもどうにもなんなくね。特に俺とユメコはそういう考え方で生きている。

「人造人間で、元になったのは女性ですよ」

「あー、はい。終わりですね」

「終わりですわね」

いそいそと王家に伝わる鎧（王女様をチンポで屈服させて取った）を脱ぎ散らかして、窓辺に立ちはだかる。

今日も俺のチンポは元気だ。

俺の元気は減気しているが、転生特典は本当に強力だぜ。

「王様は見られれば見られる程バフが入るのでやっぱり王都が最強モードですわ」
「仮面ライダー風の名付けてくれ」

「私特撮オタクじゃないのでそういうのはちょっと」

俺もそうじゃないんだ。

「さ、行ってくるか。流石にあのサイズは試したこと無いけどチンポどうにかなんのかな」

「また肥大化するのでは？」

「勘弁してほしいが……王都に巨大チンポ出現は洒落にならない」

手すりに足掛けてブラブラ揺れるチンポとキンタマを爽快感に浸しながら、俺は思う。

チートハーレムなんて願うものじゃないし欲しがるものでもないな。

こんなものあってもどうしようもないぜ。

諦めて勉強して自分の好きな事をしている方がよっぽど楽しい生活だ。

「待ってろよエヴァンゲリオン！ シンジくん！ あとなんたらアスカ！ 眼帯

付けてて可愛いね！」

さようなら、すべてのボーイミーツガール。

さようなら、すべてのチートハーレム。

さようなら、すべての神様転生。

父さん母さん、俺、行くよ！！！！

「ユニコオオオオオオオオオオオン！！！！！！」

尾形百之助「おめでとう」

マリアンヌ・ピースラウンド「おめでとう」

市川雛菜「おめでとう」

ガッシュ「おめでとう」

エネル「おめでとう」

シャンク「おめでとう」

市丸ギン「めでたいなあ」

碓シンジ「おめでとさん」

ハーメルンの便所「グワツグワツ」

虎杖悠二「おめでとう」

ミゲル「おめでとう」

ウマ娘プリティーダービー「おめでとう」

織斑千冬「おめでとう」

みんな……ありがとう!!

神に、ありがとう

神に、さようなら

そして、全ての転生者（チルドレン）に

チートハーレム杯、堂々の完結！

アツシユのチンポ気持ち良すぎるだろ!!!!!!!!!!!!!!

ニコボナデポチンポ

著者 青木ルリ

発行日 2022年7月30日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/293470/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
